日刊CARGO 電子版
最新ニュース配信中！
日刊CARGO 検索

日刊CARGO 物流総合紙
Daily CARGO Transport & Logistics News
2013年(平
5月2
水曜日
第10
月曜～金曜発行
購読料：1カ月
(昭和44年9月30日
http://www.dail

荷主企業を取り巻く雰囲気は確実に明るくなってきているが、では実績を見てどうかとなると、それほど物量が増えているわけではない」「過去4～5年を振り返ると、リーマン・ショックや日系自動車メーカーのリコール問題、タイの洪水、日本の震災などさまざまなマイナス要因があった。そうした状況が落ち着きつつあるが、水準としてはまだリーマン前にも届かない状況だ」――。船社関係者の声を総合すると、足元の環境改善を歓迎しつつも、荷動きの実態にはまだ大きな変化が生じていないことが見て取れる。

名古屋港出しのコンテナ貨物で主力品目である自動車部分品は、景気の低迷が続く欧州向けでは伸び悩みが見られるものの、北米やアジア域内向けの出荷は堅調に推移している。ただ「実際の輸送実績が大きく伸びているというわけではなく、北米向けは全体として微増、アジア向けではそこそこといったところではないか」との声は、船社各社で共通している。CKDなど生産部品の輸送を引き受けている船社は、メーカー側から出荷計画を前広に受け取っており、船社間によって若干の温度差はあるものの、日当たりの出荷本数が大きく増える状況にはいたっていない。

自動車部分品に次ぐ輸出品目である工作機械は、全体の出荷量としては昨年よりも下回る見通しだったが、今のところ健闘しているようだ。名古屋港出しの工作機械は11年、12年と好調に推移してきたものの、昨年末ごろから出荷の勢いが鈍化。また、海外向けの出荷が一巡することもあって今年は大きな伸びは見込めないというのが当初の見通しだったが、今年に入ってから一部では回復傾向も見られており、「思ったほどの減少までには至らなかった」「インドネシアなど

この人に聞く

ユニエツクス社長
脇田　隆光氏

在来分野で差別化図る

見えつつある。ただ、コンテナ貨物も含めた日本発着貨物の港を将来的にも維持できるのかという懸念はなお強い。こうした組んでいくのか、脇田隆光代表取締役社長に現在の取り組みを聞いた。

――前期の事業概況はどうだったか。

脇田　上期は全般的に堅調で予算もクリアしていたが、下期から状況が変わった。特に昨年12月と今年1、2月は収支の低下が目立ち、3月に入ってコンテナや完成車の駆け込み需要があってやや取り戻したが、通期では減収減益は免れなかった。

当社の港運事業と物流事業の売上比率はほぼ拮抗しているが、その両方が落ち込み、特に港運のほうで下落率がやや高かった。この理由は明確で、欧州航路に景だ。これで日本に寄港するアジア―欧州サービスが減少し、当社運営の東京港・大井ターミナルと神戸港・六甲ターミナルへの寄港頻度が以前のウイークリーから隔週へと減少した。頻度減少と荷動き自体の低迷により、ここでの取扱量が3割以上減った格好となる。その他航路では東南アジア航路の取り扱いが堅調

日本郵船グループで、港運事業と物流事業の二つを主力とするユニエツクス。昨年度は基幹航路サービスの寄港減少や輸出入荷動きの鈍化など事業環境の悪化に見舞われたものの、足元では在来貨物を中心に回復の兆しがあるものの今後の回復見通しはなお不透明で、基幹航路の寄港。こうした環境のもと港運・物流事業の強化へどう取り組みを聞いた。（文中敬称略、聞き手・小堺祐樹）

おける貨物需要の鈍化と、それを背景とした昨年3月のアライアンス間のアジア―欧州サービスの統合が背で、欧州の落ち込みをやや取り戻した。

――物流事業はどうか。

脇田　やはり後半の落ち込みが目立ち、低温物流以外では全般的に苦戦した印象だ。低温物流では大井水産ターミナルに自社スペースを確保しているが、11年度は貨物量が増えすぎて倉庫キャパシティーを上回り、外部倉庫を活用せざるを得なくなって採算面は悪化してしまった。

これに対し、昨年度は量自体は減らしたものの借庫も少なくなったので採算は改善している。ただ海上貨物の輸出入は低調で、特に中国関連の案件ではアパレルや機械類、食材、建機など全般的に取り扱いが減った。中国から欧州への輸出が鈍化しているため、それに伴って生産に必要な日本からの部材供給も減少している。

一方で倉庫事業は堅調だ。昨年末は大きく落ち込んだが、ここに来て水面上に出てきている。顧客からも今後の出荷予想台数が増えそう、という声が寄せられるようになってきており、ここは円安の効果を感じている。コンテナはまだ明確な変化はないものの、環境は明るくなってきている。以前に比べて、先行きに期待が持てるようになってくると期待している。

また郵船ロジスティクスが、これまで在来船輸送が中心だった鋼材コイルをコンテナで輸送するという小口輸送サービスを始めており、その現場作業を横浜と神戸で担当している。この荷役は特殊な機器・機材が必要で、どこでもできるサービスではない。差別化が可能な分野であり、顧客からも注目されている輸送形態だ。同様の需要は他にもあると思うので、こうした分野の開拓に力を入れていきたい。

3面に続く

った。当社では自営拠点として大井、大黒および六甲に物流センターを置き、その他に大井冷蔵庫を運営している。今後、営業や倉庫オペレーションの強化にさらに力を入れていく。

――今後の見通しについてはどうか。

脇田　3月以降、建設機械などの輸出見通しは良くなってきているという印象てきたのは大きな変化だ。

また、当社は在来貨物を取り扱う横浜と神戸のターミナルで、輸出貨物をあらかじめ前受けし、必要に応じて在来船やコンテナへのバンニング作業を行って出荷するという「TRS（ターミナル・レシーピング・サービス）」の積極的な集荷を行ってきた。この成果も今後、出て

【略歴】（わきた・たかみつ）1972年4月日本郵船入社。94年NYK（Australia）PTY・LTD.取締役社長、2000年名古屋支店支店長、06年日本コンテナ輸送代表取締役社長などを経て10年6月より現職。早稲田大学商学部卒。

スライドドア式コンテナ

ＥＦインターナショナル

主要港で新型コンテナ展示

ＥＦインターナショナル（中尾治美代表取締役）はこのほど、横浜港、大阪港および名古屋港においてスライドドア式コンテナの展示を開始した。

通常のコンテナが観音開きなのに対し、スライドドア式コンテナはサイドが全開するため作業性が大幅に高まるのが特徴だ。フォークリフト２台での荷役が可能で、開口部が大きいため作業性が良く、荷役効率が大幅に改善する。

新製品では、スライドドアの２枚目のドアの位置を上端のレール部分にどこでも自由に固定できるため、ドアが風で煽られて作業者に危険を及ぼす恐れがない。また既存品では、２枚ドアのヒンジが表に出ているためシールを壊さないままでも荷抜きの恐れがあったが、新製品ではヒンジを内側としたことで安全性が向上している。

青浦に物流拠点移転
上海保利佐川物流

ＳＧホールディングス・グローバルの中国法人、上海保利佐川物流は４月に上海地区の物流センターを青浦区に新築した４階建て倉庫＝写真＝に移転した。延べ床面積７７５５平方㍍で、手狭だった従来の桃浦物流センターに比べ１・５倍の規模となり、３ＰＬ事業の新物流拠点としてスタートした。

同センターは嘉定区と閔行区に隣接した青浦区の華新地区にあり、高速道路Ｇ２の華新ランプから車で５分の場所。上海市中心部までＧ２、Ｇ42を車で走って約40分という距離。１階には、トラックドックが七つあり、上階の３ＰＬ貨物の搬出入口として使用。２～４階は床が防塵加工されており、精密機械などデリケートな貨物の保管が可能だ。現在は美容機器、冷暖房機器、通販関連、シューズなど中国内販向け貨物の全土配送の基地としているほか、自動車部品をメーカーにＪＩＴ納品する基地としている。

同社では上海地区で佐川急便の宅配（小口貨物）事業を中国で展開する上海大衆佐川急便物流、検品・検針・アソートなどを行う佐川喜楽客思物流（シロックス）と協力関係を強化していく方針で、３ＰＬ事業でも情報を共有し営業展開しているほか、今後はそれぞれの機能を補完し三位一体となった展開をしていくことになる。

あす公的支援検討小委

国土交通省は23日、「公的支援に関する競争政策検討小委員会」を開催する。同検討小委員会は、今回が最終会合。議題は報告書（素案）について。

【略歴】（いしだ・ただまさ）1968年4月日本郵船入社。2001年6月常務取締役、02年6月代表取締役および専務取締役、04年4月代表取締役および副社長、06年4月代表取締役・副社長経営委員、07年4月日本貨物航空代表取締役副社長などを経て、11年1月(財)癌研究会顧問、11年4月（公財）がん研究会常務理事・理事長補佐。慶應義塾大学経済学部卒。68歳。

政府は21日、日本貨物鉄道（ＪＲ貨物）の代表取締役会長に、元日本郵船副社長、元日本貨物航空（ＮＣＡ）者を決定する予定。

"Moving from Sustainability to Profitability"
5th International Networking C
AIRCAR